

---

# 共同研究の経過と概要

---

篠原 徹

## 1. 目的

本研究は、文化をもつ社会集団と環境との相互作用の研究を通じて、日本列島に通時的に展開した人間の歴史を、「自然の破壊」と「自然との共存」の2つの側面から明らかにする。多様性に富んだ日本列島の環境に内在する力を引き出す側面は、生業構造から社会システムまで、さまざまなレベルで環境に適合する社会的技術として存在してきた。それは、狩猟・採集・漁撈・農耕など自然に関わるヒトの労働が、生産・流通・消費のプロセスのなかで多様化した存在様式に現れている。本研究では、その多様性を明らかにすると同時に、それらを裏打ちしている自然認識・環境認識の特質や、労働観と技術観の固有性を抽出する。また、日常繰り返し行われる個々の人間の営為が、環境に対して共存的であったのか、非共存的であったのか問い直す。

主たる課題として第1に、資源としての環境に内在する力を引き出す側面をヒトの自然誌として捉え、そこからヒトと自然の関係史を、第2に、生きていくための自然誌的な知識の形成、発展、継承の歴史を検証する。第3に、日本の近世的社会と近代社会とで大きく異なるといわれる自然とヒトとの関係のありかたの、継承と断絶について実証的に明らかにする。

## 2. 共同研究員（\*は研究代表者）

石井英也 筑波大学歴史・人類学系  
内山 節 学識経験者  
岡 恵介 アレン国際短期大学  
鬼頭秀一 東京農工大学農学部  
小林 茂 大阪大学大学院文学研究科人文地理学  
佐藤常雄 筑波大学農林学系  
菅 豊 北海道大学文学部（現・東京大学東洋文化研究所）  
高橋美貴 新潟大学教育学部（現・東北大学大学院文学研究科）  
鳥越皓之 関西学院大学社会学部（現・筑波大学社会科学系）  
西田正規 筑波大学歴史・人類学系  
野地恒有 愛知教育大学教育学部  
深谷克己 早稲田大学文学部  
堀尾尚志 神戸大学農学部

---

---

松井 健 東京大学東洋文化研究所  
水口憲哉 東京水産大学水産学部  
安室 知 熊本大学文学部  
義江彰夫 客員教員（東京大学大学院総合文化研究所）  
\*篠原 徹 本館民俗研究部  
辻誠一郎 本館歴史研究部  
西本豊弘 本館考古研究部  
平川 南 本館歴史研究部  
[研究協力者]  
エリック・ローラン 岐阜経済大学  
蓬田伸光 筑波大学歴史・人類学系大学院生  
佐治 靖 福島県立博物館・学芸員  
中野正貴 東京水産大学大学院生

### 3. 経過

平成7年度

第1回研究会（於：歴博） 7月14日・15日

「本研究課題について」	篠原 徹
「与論系屋久島島民のトビウオ漁 ―漁業移住と民俗学―」	野地 恒有
「人間非中心主義的環境倫理の歴史的研究 ―人間，自然，社会―」	鬼頭 秀一

第2回研究会（於：歴博） 10月27日・28日

「ムラ仕事としての坪刈の歴史的意義」	佐藤 常雄
「霞ヶ浦におけるワカサギ漁業の歴史」	水口 憲哉
「不安定水田と田畑輪換」	小林 茂

第3回研究会（於：歴博） 12月1日・2日

「北上山地における生業の返遷と自給性の確保」	岡 恵介
「自然と労働」	内山 節
「近代前期における水産資源の〈保護繁殖〉政策」	高橋 美貴

平成8年度

第4回研究会（於：歴博） 7月11日・12日

「水田漁業をめぐる人と魚と稲」	安室 知
「マイナー・サブシステムの世界」	松井 健

---

「ウグイ漁とナレズシ ー福島県南会津地方伊南川流域の事例ー」	佐治 靖 (ゲストスピーカー)
第5回研究会 (於：歴博) 11月30日・12月1日	
「家族労働の存続の仕方 ー近世の農耕と諸稼ぎー」	深谷 克巳
「メンタル・インピーダンスという概念用語の提案 ー田植機普及過程の ケース・スタディー」	堀尾 尚志
「フローとしての労働 ー新潟県山北町大川のサケ漁の事例ー」	菅 豊
「魚見によるクロイオ漁 ー長崎県三井楽町高崎ー」	水口 憲哉
第6回研究会 (於：歴博) 3月6日・7日	
「<自然暦>にみる生業と自然の関係」	篠原 徹
「ノルウェー・フィンマルクにおけるサミ人の伝統的サケ漁について」	中野 正貴 (ゲストスピーカー)
「縄文時代の労働と自然」	西田 正規
平成9年度	
第7回研究会 (於：歴博) 6月28日・29日	
「日本文化における虫 ーそのカテゴリー, 表現, 文化的な重要さー」	エリック・ローラン (ゲストスピーカー)
「常民と自然」	鳥越 皓之
「クック諸島におけるマイナー・サブシステムとしての漁撈活動」	竹川 大介
第8回研究会 (於：福島県立博物館) 10月25日・26日	
「山林所有者の伐採性向における信頼関係」	蓬田 伸光 (ゲストスピーカー)
「マイナー・サブシステム, 持続的発展, 経済とモラル, 資源・占有・利用の4つの話題をめぐる総合討論」	全員
現地調査：落葉広葉樹林地帯と山村 (福島県南会津郡舘岩村)	
第9回研究会 (於：宮崎県綾町・綾町ふれあい合宿センター) 1月31日・2月1日	
「日本歴史における労働と自然」をめぐる総合討論	全員
現地調査：照葉樹林地帯と山村 (宮崎県東諸県郡綾町)	

---

## 4. 概要

本研究はさまざまな生業構造をもつ社会集団と環境との相互作用の研究を通じて、日本列島に展開した生業と自然の関係を「自然の破壊」と「自然との共存」の2つの側面から明らかにすることであった。この学際的な領域にかかわる研究目的を達成するため、きわめて多くの学問分野の研究者に参加を要請した。またそれぞれの学問分野のなかで、とくに農耕、漁撈、林業などの生業に焦点を合わせている研究者を中心に組織した。

その学問分野は歴史地理学、環境社会学、民俗学、農業史、魚類生態学、環境倫理学、歴史人類学、文化人類学、生態人類学、近世史など多岐にわたる。

各年度の研究会はそれぞれ3回づつ行い、計9回の研究会を行った。研究会においては、現在それぞれの研究者のおこなっている実証的な調査にもとづいた報告をもとに討論して、自然とヒトの関係について、それぞれの既存の学問の領域を越えた枠組みを設定することを目指した。

平成7年度では、内水面漁業と資源、外水面漁業と環境適応、水田稲作農耕の生産量の歴史的返遷、山村の自給性などの研究発表を中心に討論し、これらに共通する環境と人間の問題点を追求した。また、これらの生業活動が環境倫理や哲学の立場から、どのように位置づけられるを論じた。つまり、これらの生業のありかたが、資源としての自然の「保全」を内包したシステムであったのかどうかの問題である。

平成8年度の研究会では、水田稲作以外の水田利用、河川のマイナーな漁撈、自然観と生業、先史時代の労働と自然など、主としてマイナー・サブシステム（研究会でのひとつの大きな成果として提唱された概念。1. 経済性はないわけではないが、大きくない、2. 資源の分散性が高いものについての生業、3. 擬似的な体験では得られない自然性を備えた生業、4. 生産のための道具の未発達性などの特徴をもつ）と定義できる生業活動の報告を中心に討論した。このマイナー・サブシステムはたとえば遊牧民のような牧畜を専門的におこなうようにいわれているところでも広範にみられ、主生業と副業という区分では生業体系を説明できないことがわかってきた。また、このマイナー・サブシステムは当該社会の自然観とも深く関連していることが指摘された。

平成9年度は、平成7年度・平成8年度の議論のなかで問題となってきた環境資源をめぐる「マイナー・サブシステム」「持続的発展」「経済とモラル」「資源・利用・占有」の4つのテーマをとりあげた。主として、今までの研究会の発表をめぐって、この4つの視角から総合的な討論をおこない、「日本歴史における労働と自然」の総括的な研究をおこなった。以上が3年間の「日本歴史における労働と自然」の概要である。

反省点としては、B班「日本歴史における開発と災害」のチームと必ずしも連携がうまくいかなかったことがあげられる。また「日本歴史における労働と自然」で「女性の労働と自然」の問題があるはずであるが、これについて研究を展開できなかったことは大きな問題であった。またテーマの性質上、経済学にも深く関わっていたが、この方面の研究者が入ってなかったことも反省すべき点であった。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)